第四章　考察

第一節　今までの考察

この章では、これまでの考察を受けて、相対主義を整理するために暫定的にとってきた三つの指標の検討を行う。具体的には、それぞれの指標に関して、〈相対主義的に見える考え方〉と〈相対主義批判〉の対立している点はどこにあるのかを考察する。そして、そのような考察を通して、本稿でなされたような相対主義批判を避けることのできる条件を提示する。さらに、われわれの生活のなかで生じる相対主義的な考えが、そのような相対主義批判を避けるための条件を満たしていることを指摘する。

けれども、それらの考察に入る前に、今までの考察の過程を振り返ってみることが役に立つ。したがって、まず、今までの過程を振り返ることから始めよう。

本稿の目的の一つは、〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉の内容を整理し、相対主義をめぐる問題を見通しよくすることであった。それゆえ、第一章では、〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉の内容を整理するため、さしあたりの指標を提出した。つまり、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》、《概念図式の評価基準》という三つの指標を示したのである。

第二章では、それらの指標を使うことによって、〈相対主義的に見える考え方〉を分析した。その際、考察の対象として使われたのは、クワイン、クーン、グッドマンの考えである。その結果、先の三つの指標に関して、それぞれの考えがどのように関係しているのかが明らかになった。

第三章では、同じく先の三つの指標を使って、なされてきた〈相対主義批判〉の内容について検討した。そこで扱われた〈相対主義批判〉は、デイヴィドソン、パトナム、バーナード・ウィリアムズの考えである。その結果、それらの〈相対主義批判〉が、先の指標と照らし合わせて、どのような考えに向けられたものかが明らかになった。

以上の考察を踏まえたうえで、次の問題は、第一章で挙げた三つの指標の検討ということになる。

第二節　三つの指標の検討

まず、《複数の概念図式の可能性》という指標の検討から始めよう。《複数の概念図式の可能性》を否定することによって、相対主義を批判しようとしたのは、デイヴィドソンであった。ここで、簡単に彼の相対主義批判を再確認しておこう。

デイヴィドソンは、概念図式を、暫定的に、翻訳可能な言語の集合ととらえ、もし概念相対主義者の言うように、異なる概念図式がありうるとしたら、それは、翻訳不可能であるにもかかわらず言語行動であるようなものだと考えた。そして、全面的にであれ部分的にであれ翻訳不可能な言語行動はありえないと論じ、それに基づいて、異なる概念図式という考え、つまり、複数の異なる概念図式が存在するという考えは理解できないものだと論じた。そして、このように複数の概念図式を否定するならば、複数の概念図式間の対立を扱う相対主義も理解できないものになるのである。そのうえ、彼によれば、異なる概念図式が理解できないということは、概念図式が同じだということも理解できないということを示していた。このような、〈そもそも概念図式があると考えることも不適切だ〉という彼の考えは、彼が全面的に翻訳不可能で言語行動であるものはないと論じているときにも現れていた。彼は、その際に、概念図式と内容の二元論は、経験論の第三のドグマであると論じていた。

では、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉は、《複数の概念図式の可能性》ということに関して、どのように考えていただろうか。

まず、クワインの場合を考える。彼は、理論が感官面の刺激を手がかりに構成されるものだと考えていたし、翻訳のマニュアルは相手の行動の傾向性を手がかりにつくられると考えていた。そして、彼は、われわれの考えを規定する、理論や翻訳のマニュアルは複数存在しうると考えていた。言い換えるならば、彼は、概念図式が複数存在しうるという可能性を理解できるものだと考えていた。

次に、クーンに関してである。本稿では彼のパラダイムも概念図式と考える立場をとっていた。なぜなら、彼によれば、パラダイムとは、ある特定の集団のメンバーに共有されている信念や価値や技術などの全体的構成であり、その要素として、記号的一般化、特定のモデルに対する確信、価値、見本例などが考えられたからである。また、彼は、複数のパラダイムの対立を認めていた。そのように、彼は、経験を組織化するものとしての概念図式が複数あり、概念図式を異にする人は、お互いに異なった世界で仕事をしているのだと考えていた。

最後に、グッドマンについてである。彼は、世界ヴァージョンが、合成と分解、重みづけ、順序づけ、削除と補充、変形などの工程によって、他の世界ヴァージョンから再制作されると考えていた。また、その際、記号は、外延指示や表出、例示などの役割を果たすと考えていた。それゆえ、世界ヴァージョンが異なるならば、その世界ヴァージョンが外延指示したり、表出したり、例示したりするものも異なるのであった。また、グッドマンは、世界ヴァージョンの複数性を主張していた。そして、ここでは、世界制作の結果得られた世界ヴァージョンのある程度包括的なヴァージョンの場合、それを概念図式と考えたのであった。したがって、彼は、概念図式が複数あり、概念図式によって世界の内容が異なると考えていたことになる。そのように、ここに挙げた三人は、《複数の概念図式の可

能性》を認めていたのである。

以上のように、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉は、《複数の概念図式の可能性》を否定するデイヴィドソンの批判と対立している。そして、もしデイヴィドソンの議論が正しいとしたら、本稿で述べられた相対主義的な考えは否定されることになる。そのうえ、異なる概念図式があると考えること、そもそも概念図式があると考えることは、概念相対主義の前提であるので、デイヴィドソンの議論が正しいならば、その議論は、概念相対主義全体に対する批判ともなりうる。しかし、このようなデイヴィドソンの相対主義批判によって、相対主義の可能性はなくなってしまうのだろうか。

その点を考察するためには、それぞれの場合に概念図式として考えられたものが、どのようなものであったかということを確認しなければならない。

まず、デイヴィドソンの場合について考えよう。彼が議論のために暫定的に認めた概念図式は、経験を組織化する方法であり、具体的には、翻訳可能な言語の集合であった。そして、それは、何らかの言語が翻訳可能だと見なされた時点で、変化していくものだろう。それに対して、共通の座標軸のなかで論じられる視点の違いは、彼によれば、概念図式の違いではなかった。

次に、クワインの場合を考えよう。本稿で彼の場合に概念図式ととらえてきたものは、翻訳のマニュアルであり、理論であった。そして、それらは、全体論的に構成されるものであった。また、彼は、『いわゆる第三のドグマについて』(1) という論文のなかで、概念図式を言語と言ってもよいと認めている。それゆえ、彼の場合の概念図式は、自分が利用している言語の集合とでも言っていいものだろう。この点で、クワインの概念図式は、デイヴィドソンの言っているものと類似している。そのうえ、クワインにとって、そのような意味での概念図式が、彼自身さまざまな箇所で引き合いに出しているノイラートの船の比喩（同じ船に乗ったまま船を修理しながら進むしかない）(2) のように、日々改訂を受けながら変化していくものだとしたら、その点でも、クワインの概念図式のとらえ方は、デイヴィドソンの暫定的な概念図式のとらえ方と似ている。しかし、それは、まったく同じではない。クワインの場合、翻訳の不確定性に見られるように、許容可能な翻訳というのは、不確かな考えである。そして、そのことから、彼は、そもそも翻訳という考え自体、不確かなものだと考えている。それゆえ、彼にとっては、翻訳可能性という考えは、実質のないものであり、そのような考えを使うことによって、概念図式を規定することは、適切ではないのである。

もちろん、ここで、クワインが概念図式をどのようなものとして規定しているかが問題になる。以前に見たように、彼の場合の翻訳の不確定性やグローバルサイエンスの決定不全性は、経験的証拠が同じでも異なる翻訳のマニュアルや異なる理論がありうるということだった。それゆえ、彼の場合、同じ経験的証拠を持つが翻訳のマニュアルや理論が違うということが、異なる概念図式があるということだった。

確かに、ここには、二つの問題がある。一つは、経験的証拠と概念図式という考えは、デイヴィドソンによって批判された経験論の第三のドグマではないかという問題である。もう一つは、翻訳のマニュアルや理論が違うということを、われわれはどのようにして知るのかという問題である。

まず、一つ目の問題から検討しよう。経験的証拠が同じでも異なる翻訳のマニュアルや

異なる理論がありうるという立場は、確かに、概念図式と内容の二元論に当てはまるように思われる。しかし、デイヴィドソンの概念図式と内容の二元論に対する批判は、無前提になされているものではなかった。彼の概念図式と内容の二元論に対する批判は、翻訳可能性と密接に結びついているいくつかのことを前提として成り立っていた。まず、概念図式を翻訳可能な言語の集合と見なすという前提がある。その前提に基づいて、デイヴィドソンは、〈概念図式と内容の二元論をとったところで、翻訳不可能な言語行動がどのようなものか規定できない〉という路線で、二元論に対して批判している。次に、〈あるものに関して共通の個別化の原則を持っている二つのものは、翻訳可能なはずだ〉という前提、および、〈真理概念はタルスキ的にとらえられるべきであり、だとするとそれは翻訳可能性の概念から独立に理解できない〉という前提がある。これらの前提を認めてこそ、彼の概念図式と内容の二元論に対する批判が適切なものになるのである。しかし、クワインの場合、翻訳可能性という考えが実質のないものだと考えていたのだから、翻訳可能性という考えが重要な役割を果たしている、これらの前提を認める必要はない。

そのうえ、『いわゆる第三のドグマについて』のなかで、クワインは、デイヴィドソンが信念と真理を混同していると批判している。クワインによれば、事実や世界が問題にされる真理に関しては、真理をタルスキ的に引用解除ととらえることに付け加えるものは何もなく、その点でデイヴィドソンは正しい。しかし、真理と信念は違う。信念の正当化が問題にされる場合には、経験的内容は重要な役割を果たす。そして、クワインは、真理の理論としての概念図式と内容の二元論（概念図式と事実の二元論）がドグマであるとしても、信念が正当化される証拠の理論としての概念図式と内容の二元論（概念図式と経験的内容の二元論）は、残しておいてもよいものだと論じるのである。

次の問題は、翻訳のマニュアルや理論が違うということを、われわれはどのようにして知るのかということである。クワインは意味の存在を否定するという立場に立っていたので、彼の場合、翻訳のマニュアルや理論はその表記によって区別される。彼が概念図式を言語と考えてもよいと言っているときは、その言語は表記としてとらえられているのである。

デイヴィドソンは、表記の相違は概念図式の相違の根拠にはならないとしているが、クワインにとっては、そうではなかった。もちろん、概念図式を表記と考えることには、存在論的相対性が伴っていることから、概念図式が同じでも、存在論が同じだとはかぎらなくなる。デイヴィドソンが表記の相違は概念図式の相違の根拠にはならないと論じるとき出している〈心的出来事を指示する単語の使用を禁じて生理学的状態と出来事を指示する単語だけを使っても、新しい語が心的出来事を指示するようになるかもしれない〉という例は、クワインの場合、存在論的相対性が避けられないということであって、表記が概念図式ではないということの根拠ではない。

ここで、このような存在論的相対性は、〈何が存在するかは概念図式によって異なる〉という概念相対主義の前提を壊すように見えるかもしれない。なぜなら、概念図式が同じでも存在論が違いうるからである。しかし、存在論的相対性が概念相対主義の前提を壊すものだとは言えない。なぜなら、存在論が違うということが、〈存在論が違いうる〉ということにとどまらず、存在論が違っている場合として実際に検討されるときには、概念図式はその存在論の違いも含みうるように再解釈されているのであり、再解釈の結果も含め

た概念図式同士は、表記としても異なるものになりうるからである。そのように、概念図式が同じでも存在論が違いうるということは、現実のものとして理解されるときには、〈何が存在するかは概念図式によって異なる〉という概念相対主義の一部だとも考えられる。もちろん、このことは、再解釈をすることによって、いつか、〈概念図式が同じなら存在論も同じ〉という地点に到達できるということを示してはいない。確かに、概念図式が同じでも存在論が違いうるという可能性は、どれだけ再解釈を重ねていっても残る。しかし、それは、概念図式が今のものと違いうるという相対主義に有利な可能性でもあるのである。

以上のようにクワインの概念図式をとらえるならば、クワインの概念図式は、デイヴィドソンの考えている概念図式とは違うということがわかるだろう。

今度は、クーンの場合を考えよう。彼が考察の対象としているのは、科学者集団の持つパラダイムであり、科学理論だった。そして、そのようなパラダイムは科学者集団の行動を吟味することにより得られるものだった。彼は、そのようなパラダイム間の通約不可能性を主張していた。しかし、彼によれば、自分の言う通約不可能性は、理解可能性を否定するものではなかった。彼は、刺激や神経器官が同じであるということや共有されている語や日常的語彙を手がかりして、異なるパラダイムを持つ人同士でもコミュニケーションができると考えていた。このような彼のパラダイムが概念図式だとすれば、それは、デイヴィドソンが言うような翻訳可能な言語の集合ではなく、部分的なものであり、概念図式の違いは、共通の座標軸のなかで論じられる視点の違いと考えてもよいものだろう。

さらに、グッドマンの場合を考えよう。本稿では彼の世界ヴァージョンを概念図式と考えてきた。しかし、それは、デイヴィドソンの言うような翻訳可能な言語の集合ではなかった。グッドマンの場合、異なる世界ヴァージョンをわれわれが理解できたとしても、異なる世界ヴァージョンであることをやめることはなかった。だとすれば、グッドマンの場合にわれわれが概念図式として考えてきたものも、デイヴィドソンが言うような翻訳可能な言語の集合ではなく、部分的なものであり、概念図式の違いは、共通の座標軸のなかで論じられる視点の違いと考えてもよいものだろう。

このように考えてくるならば、デイヴィドソンの相対主義批判が相対主義の可能性を完全に否定してしまうかどうかは、その前提となっている概念図式の暫定的な規定だけを概念相対主義を主張するための概念図式と考えるべきかどうかということにかかっている。彼がそのような概念図式の規定に至ったのは、彼が批判しようとしていた相対主義が概念図式間の相互理解可能性を否定している考えだったからである。そして、彼の場合には、相互理解可能性ということは、相互翻訳可能性だったのである。それゆえ《複数の概念図式の可能性》に関する意見の対立をよりよく理解するためにも、次に、《概念図式間の相互理解可能性》という指標について考察したい。

デイヴィドソンは、〈概念図式間の相互理解を否定することによって、概念図式相互の比較可能性を否定する考え〉を、概念相対主義だと考えた。そして、彼は、そのような相対主義を前提に概念図式をどのようなものとしてとらえるかを規定し、相対主義を批判していた。また、パトナムも、相互理解可能性を相互翻訳可能性ととらえ、《概念図式間の相互理解可能性》を否定する考えは不適切だとして相対主義批判を行っていた。彼によれば、通約不可能性を認めることは翻訳不可能性を認めることであり、翻訳不可能性を認めることは相手の発する音を解釈できないということであり、相手の発する音を解釈できな

いということは相手を思考する人間として認めないということだった。そして、彼は、われわれが相手を思考する人間として認めるかぎりは、通約不可能性は不適切だと論じたのであった。また、彼によれば、同じ語に対する概念理解が異なっているからといって、翻訳が不可能だということにはならなかった。それどころか、概念理解が異なっていると言うことができるということは、翻訳が可能だということを示していたのである。

しかし、これらの〈相対主義批判〉は、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉に対する批判とはなっていない。先にも見たように、クワインやクーンやグッドマンの概念図式は、相互理解不可能なものではなかったのである。

もちろん、ここで、デイヴィドソンやパトナムの言っている相互理解可能性とクーンの考えている相互理解可能性は異なると指摘されるなら、それは正しい。なぜなら、クーンにとっては、異なる概念図式を理解できるということ、そして、異なる概念図式を翻訳できるということは、デイヴィドソンやパトナムに見られたように、〈相手を合理的なものとして理解できる〉ということを含まないからである。けれども、デイヴィドソンやパトナムの〈相手を合理的なものとして理解できる〉という考えは、無前提のものではない。デイヴィドソンの場合もパトナムの場合も、〈相手をもっともよく解釈できなければならない〉、〈相手を解釈することに成功しなければならない〉ということが前提になっている。しかし、この前提は、必ずしも認められる必要はない。なぜなら、その前提を認めない〈相手の意見には同意しないが理解できる（この場合の意見の違いは、デイヴィドソンの言うような説明可能な誤謬ではない。）〉という意味での相互理解可能性も、比較可能性を認める基盤となりうるものだからである。

上記のように考えるならば、《概念図式間の相互理解可能性》を否定する考えを相対主義であると考える立場だけが、相対主義であるとは考えることができなくなる。だとすると、《概念図式間の相互理解可能性》を否定する考えが相対主義であるという前提のもとでなされた〈相互理解可能な言語の集合〉という概念図式の規定は、必ずしもすべての相対主義に当てはまるものではなくなる。クワインやクーンやグッドマンは、概念図式を相互理解不可能なものとはとらえていなかったので、彼らの概念図式の規定がデイヴィドソンの概念図式の規定と同じではないということは、当たり前であり、それらに対しては、〈翻訳不可能で言語活動でないものはないから、異なる概念図式は理解できないものだ〉というデイヴィドソンの批判は当てはまらないのである。

けれども、ここにはまだ問題が残っている。デイヴィドソンは、〈翻訳不可能で言語活動でないものはないから、異なる概念図式は理解できないものだ〉という形でだけでなく、経験論の第三のドグマという形でも、そもそも概念図式があると考えることも不適切だと示していたからである。もちろん、先にクワインについて論じた箇所で述べたように、デイヴィドソンの概念図式と内容の二元論に対する批判は、翻訳可能性と密接に関係したいくつかのことを前提として成り立っていた。そして、彼の概念図式と内容の二元論に対する批判全体は、それらの前提を認めてこそ、適切なものになるのだった。けれども、デイヴィドソンの概念図式と内容の二元論に対する批判の論点のなかには、彼の議論の前提から離れても成り立つように思えるものがあった。それは、〈まったく組織化されていないものを組織化するという方法によってつくられるもの〉として概念図式を規定するという考えは間違いであるという論点である。デイヴィドソンによれば、もし組織化されるもの

があるなら、それは、個別化された存在でなければならなかった。そして、個別化された存在は、まったく組織化されていないものではありえなかったのである。しかし、この批判も避けられる。なぜなら、概念図式の規定は、概念図式を〈まったく組織化されていないものを組織化するという方法によってつくられるもの〉と理解している場合だけにはかぎられないからである。クワインの場合は、個別化された存在、言い換えるならば、指示対象のようなものは、まったく組織化されていないものではなかった。クーンの場合は、パラダイムは学ばれるものであり、組織化されていないものを組織化するという方法でつくられるものではなかった。グッドマンの場合は、世界ヴァージョンは他の世界ヴァージョンからつくられるのであり、まったく組織化されていないものを組織化するという考えは否定されていた。このように、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉はどれも、概念図式を〈まったく組織化されていないものを組織化するという方法によってつくられるもの〉とは考えていないので、上述の批判は当てはまらないのである。

最後に、《概念図式の評価基準》について見てみよう。《概念図式の評価基準》を否定する考えは不適切であるとして、相対主義を批判していたのは、パトナムであり、ウィリアムズであった。

パトナムは、文化間の問題に対して客観的なことを何も言えなくなるとして相対主義を批判していた。また、彼の言う合理性についての規準的な考え方も否定していた。合理性についての規準的な考え方をとるならば、対立するある規範ともう一つの他の規範のどちらが合理的かを論じることができなくなるのだが、彼によれば、それは不適切だからである。それゆえ、彼にとっては、概念図式の適切さは、その概念図式のなかでのみ決まっている合理性によっては判断されない。彼によれば、どのような概念図式が適切かが論じられるためには、理性、合理性が前提されていなければならないのであり、概念図式の適切さは、合理性についての規準的な考え方で説明されるようなものではなかったのである。

ウィリアムズによれば、すべては概念図式に相対的であるとしながら、相対的でない主張をしている考えには、問題があった。彼によれば、評価の問題が真正なものとして生じる概念図式の対立の場合には、客観的に、それらの概念図式に対して判断を下し、どちらかの概念図式を選択をすることができなければならなかった。

では、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉は、《概念図式の評価基準》に関して、上記の〈相対主義批判〉と対立しているのだろうか。

まず、クワインが《概念図式の評価基準》に関してどのように考えていたかを思い出そう。彼は、翻訳のマニュアルのどれか一つだけが正しいと言えるとは考えていなかったし、理論に関しても、セクト主義をとるか普遍主義をとるかで揺れていた。彼は、複数の適切に思える概念図式が存在しうるという可能性を否定できるとは考えていなかったのである。

次に、クーンに関して見てみよう。たとえ彼が〈選択のためのよい理由〉を考えていたとしても、彼は、概念図式の選択が完全に客観的なものだとは考えていなかった。彼によれば、選択のためのよい理由は、改宗のための動機や改宗が起こりやすい状況をつくるだけであり、パラダイムの選択、本稿の術語で言えば、概念図式の選択は、いずれにせよ、改宗であると考えられていたのである。

さらに、グッドマンの考えを振り返ろう。彼は、複数の世界ヴァージョンが一つの世界

ヴァージョンに還元されるとは考えていなかった。彼によれば、無数の他にとることができる世界ヴァージョンがあるのだった。そして、それらの複数の世界ヴァージョンのなかのどれか一つだけが、あらゆる点において適切なものとして選択されるとも考えられていなかった。つまり、グッドマンは、複数の概念図式からあらゆる目的にふさわしい概念図式を選ぶことができるとは考えていなかった。彼によれば、複数の世界ヴァージョンがあるのであり、そのなかで、そのときの目的にふさわしいものが選ばれているのである。

以上のように、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉は、確かに、《概念図式の評価基準》が厳密で確実な基準であることを否定していた。もし、パトナムやウィリアムズの批判が、厳密で確実な基準がなければならないということを主張しているのだとしたら、その批判は、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉に該当するだろう。

けれども、それが、適切な批判かどうかは別の問題である。なぜなら、パトナムやウィリアムズの考えを、概念図式の評価に関して厳密で確実な基準がなければならないというものだと解釈することができたとしても、彼らはそのことに対する説得力のある説明をしていないように思われるからである。パトナムは、われわれが客観的、合理的に判断できないというのは不適切だという理由で、理性や合理性を要請していたのであり、ウィリアムズの場合も、客観的な判断が可能な場合があるはずだということは前提だったのである。

けれども、パトナムやウィリアムズの批判は、次のように考えることもできる。つまり、彼らの相対主義批判の趣旨を、〈概念図式に関するメタな問題に対して何の評価もできないのは不適切だ〉と解釈することもできる。

しかし、その場合は、本稿で論じてきた〈相対主義的に見える考え方〉は、その批判に当てはまるとは思えない。なぜなら、〈相対主義的に見える考え方〉を主張している人たちも、概念図式に関するメタな問題に対して何の評価もできないとは考えていなかったからである。

クワインは、感官面の刺激などに訴えることを理論の証拠として認めていた。また、翻訳のマニュアルに関して言えば、会話がスムーズにいき交渉が成功するという意味でコミュニケーションがうまくいくことが、翻訳のマニュアルであるために必要なことであった。そのように、彼の場合、理論に関しても翻訳に関しても、制約があったのであり、どんな理論でもよい、どんな翻訳のマニュアルでもよいということではなかった。

クーンの場合も、先に見たように、最終的には改宗だとしても、選択の際によい理由があることを認めていた。また、彼は、今の理論の方が以前の理論より優れていると考えていた。彼にとっては、優れた理論と優れていない理論の区別はありうるのであり、どの理論も同程度によいというわけではなかった。

グッドマンも、正しい世界ヴァージョンと間違った世界ヴァージョンを分けることができると考えていた。そして、その際手がかりとなるのは、投射可能性であり、投射可能性は、擁護の強さという考えを使って説明され、擁護の強さは、過去の現実の投射や他の述語の現実の投射などから判断された。

このような状況のもとで、もし、パトナムやウィリアムズの場合になされた相対主義批判の趣旨が、〈概念図式に関するメタな問題に対して何の評価もできない〉ということであったとしたら、その批判は、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉に向けられたものとしては適切ではないのである。

以上見てきたように、〈相対主義的に見える考え方〉に対する〈相対主義批判〉はどれも、〈相対主義的に見える考え方〉に正当に向けられたものではなかった。《複数の概念図式の可能性》を批判することによる相対主義批判が当てはまるのは、デイヴィドソンのやり方で概念図式を規定する場合だけであり、デイヴィドソンの場合とは異なるやり方で概念図式を規定することもできた。もちろん、どちらの概念図式の規定が正当かという問題もありうる。しかし、少なくともデイヴィドソンのやり方で概念図式を規定することが正当だという根拠がない以上、デイヴィドソンの相対主義批判は、異なるやり方で規定された概念図式を考えている相対主義には、当てはまらないものである。《概念図式間の相互理解可能性》は、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉も認めうるものであって、相対主義批判との対立点にはならなかった。また、《概念図式の評価基準》を求める形での相対主義批判に関しては、それが厳密で確実な基準であることを求めているものとしては、その批判の根拠ははっきりしなかった。そして、《概念図式の評価基準》を求める形での相対主義批判を〈概念図式に関するメタな問題に対して何の評価もできないのは不適切だ〉と解釈するならば、その点は、本稿で扱った〈相対主義的に見える考え方〉と対立するものではなかった。以上のような考察をふまえるならば、本稿でなされたような相対主義批判を避けることのできる考えは、デイヴィドソンとは異なる仕方で概念図式を規定し、複数の概念図式の存在とそれらの間の相互理解可能性を認め、概念図式に関するメタな問題に対しても何らかの評価ができることを認める考えであるだろう。

第三節　概念相対主義の可能性

今まで述べてきたことは、本稿で論じたような相対主義批判に当てはまらない概念相対主義は、以下のような条件を満たさなければならないということだった。

まず、第一に、そのような相対主義は、デイヴィドソンとは異なる仕方で概念図式を規定し、複数の概念図式の存在を認めなければならない。また、それらの概念図式は相互に理解可能でなければならない。さらに、そのような相対主義は、概念図式に関するメタな問題に対しても何らかの評価ができることを認めなければならない。

しかし、上記の条件を満たすからといって、つまり、本稿で論じた相対主義批判に当てはまらないからといって、そのような考えに相対主義の可能性があるとはかぎらない。上記の条件を満たすもののなかに相対主義の何らかの可能性があるためには、われわれの生活のなかで生じる相対主義的な考えが、そのような条件を満たしているということを示さなければならない。そして、その問題に答えるためには、どのようにして、どのような形の相対主義的な考えが生じてくるのかを確認する必要がある。そのことによって、相対主義的な考えが生じるためにどのような条件が必要であるかがわかるだろう。

概念図式に関する相対主義的な考えが生じるためには、まず第一に、われわれが自分の考えを規定している概念図式を持っているということが、認められなければならない。しかし、われわれが自分の概念図式の内部にとどまっていて、自分の概念図式を検討されるべきものとして考えないとしたら、相対主義的な考えは生じない。それゆえ、自分の概念図式を考察の対象とする何らかの契機がなければならない。

その契機として何が考えられるかが問題である。まず考えられる契機は、自分の概念図式のなかでは予想していなかった事態が生じるということである。そして、その予想していなかった事態が、今までの自分の概念図式では処理できないとき、自分の概念図式の適切さを検討しようとする立場が生じる。たとえば、新しいはかりの登場によって、燃焼した金属が重くなるということに気がついたとき、燃素説という自分の概念図式を考察の対象としようとする立場が生じうる。

次に考えられる契機は、自分の概念図式に何らかの欠陥を発見したときである。今まで自分の概念図式で当たり前だと思っていたことが実はそれほど明らかでなかったということに気がついたとき、われわれは、自分自身の概念図式を検討対象にする。たとえば、平行線の公理が必要かどうか問われる場合がそうである。

上記の二つの契機で検討対象にされているのは、自分の概念図式だけである。しかし、上記の二つだけが、概念図式を検討対象にする契機ではない。自分の概念図式だけを考えて概念図式を検討対象にするのではなく、自分の概念図式と競合する概念図式を考え、それらの比較の問題として概念図式を検討対象とするという状況を引き起こすような契機もある。

その場合の第一の契機は、自分の概念図式では予想しえなかった事態が生じたとき、その予想しえなかった事態にうまく対処できる競合する概念図式の存在に気づくことである。その場合、自分の概念図式を検討対象として、競合する概念図式と比べようとする立場が出てくる。たとえば、燃素説に対抗するものとして、酸素燃焼説の存在が明らかになった場合、自分の燃素説を検討対象として、酸素燃焼説と比べようとする立場が生じうる。

そして、もう一つの契機は、自分の概念図式で当たり前だと思っていたことが実はそれほど明らかでなかったと気がつき、自分の概念図式と対抗する概念図式の存在に気がつくことである。その場合も、自分の概念図式を検討対象として、競合する概念図式と比べようとする立場が出てくる。たとえば、ユークリッド幾何学に対抗するものとして、非ユークリッド幾何学が考えられるような場合である。

つまり、自分の概念図式を検討対象とする契機として、新しい事態の発生という外的なものと、自分の概念図式内の問題点に気づくという内的なものとがあり、競合する概念図式との比較の対象として自分の概念図式を検討対象とする契機としても、同じように、外的なものと内的なものがあるのである。

では、それぞれの契機は、どのような相対主義的な考えを生じさせるのだろうか。まず、検討対象として自分の概念図式だけを考えている場合を見てみよう。

自分の概念図式が、先に挙げたような内的、もしくは、外的契機によって、検討対象となった場合に生じる相対主義的な考えは、自分の概念図式を相対化するという形のものだと考えられる。つまり、それは、われわれの経験的証拠の処理や次に起こることの予言がまったく異ならないような、現実についての記述が複数ありうるという理論的可能性を認める考えである。言い換えるならば、自分の概念図式が他のものでもありうるのではないかということを認める考えである。

たとえば、相手とのコミュニケーションで摩擦が生じたとき、それまでうまくいっていた自分の翻訳のマニュアルとは別の翻訳のマニュアルの存在に気づくことはありうる。そして、その後で、自分の翻訳のマニュアルを改訂することによって、コミュニケーションにおける摩擦がなくなったとしても、次のような疑いは残りうる。つまり、われわれの経験的証拠の処理や次に起こることの予言に関する説明能力がわれわれのものと同じであるが、われわれのものとは異なる翻訳のマニュアルがありうるという考えは残りうる。なぜなら、予想していなかった事態が生じ、自分の概念図式を検討対象にしようとする前においても、それ以外の点に関しては、まったく説明能力が同じである概念図式があったということを認めなければならないからである。そのようにして、自己の概念図式の相対化ということが起きるのである。

以上のように考えるならば、第二章で検討したクワインの考えは、自己の概念図式の相対化という点で、相対主義的だったのである。

自分の概念図式を何らかの契機により検討対象とした場合に生じる相対主義的な考えは以上のようなものだが、では、そのように考えることができるためには、どのような条件が満たされていなければならないのだろうか。

もちろん、ここでは、概念図式が複数ありうるという可能性が認められなければならない。しかし、ここでとらえられる概念図式は、デイヴィドソンが言うような〈翻訳可能な言語の集合〉としての概念図式である必要はない。それは、クワインの考えが、この自己相対化という意味で相対的であるということからも見て取れる。クワインは、デイヴィドソンとは違う形で、概念図式を規定していたのである。

また、自己の概念図式の相対化の場合、自分のとは異なる概念図式が理解不可能なものだと考えられているわけではない。自分の概念図式が他のものでもありうると認めることは、理解可能になった異なる概念図式の存在があってこそ、出てくるものなのである。異

なる概念図式は理解可能なものでなければならない。

さらに、われわれは、概念図式が適切なものかどうかについて、まったく判断できないわけではない。たとえば、われわれは、概念図式を使うことによって、次に起こることを予言することができなければならない。予言が成功しないような概念図式は適切なものとは見なされない。つまり、われわれは、概念図式に関して、何らかの判断ができなければならないのである。

次に、競合する概念図式と比較されるものとして自分の概念図式を検討対象とする場合を考えてみよう。その場合は、どのような相対主義的な考えが生じるのだろうか。

そのような場合に生じる相対主義的な考えは、概念図式に関する問題を判断するための、厳密で確実な基準はないということを理解し、自分の概念図式と対抗するものとして相手の概念図式を認めているものである。そして、その場合に厳密で確実な基準がないということは、われわれの認識能力が劣っているために、本当は存在する厳密で確実な基準を理解できないということではない。しかし、厳密で確実な判断基準がないということは、概念図式に関する判断がいっさいできないということを意味する必要はない。この立場によれば、競合する概念図式を相互に検討し、相手の概念図式を承認したうえで、自分の概念図式にとどまることもできるし、反対に、自分の概念図式を捨て、相手の概念図式を選択することもできるのである。

たとえば、現代の西洋医学を学んできて、それにしたがって、日々の生活を送っている医者が、自分が処理することのできない事柄を東洋医学で適切に処理していると考えるようになる場合を考えよう。その場合、その医者が、東洋医学にも体系があり、西洋医学とは異なる仕方で様々な病気を説明しているということを理解する可能性はある。ひょっとすると、彼は、東洋医学の体系も総合的に見て西洋医学の体系と説明力が異ならないと見なすかもしれない。けれども、だからといって、彼は、自分のバックグラウンドである西洋医学の体系を放棄する必要はない。現実に競合する他の概念図式を承認したうえで、自分の概念図式にとどまることができる。そして、また、その一方で、自分の体系を放棄して、他人の体系に変わることもできる。

では、競合する概念図式の存在を認め、上記のような相対主義的な考えを受け入れるとき、どのような条件が満たされていなければならないのだろうか。

もちろん、その場合も、概念図式の複数性を認めなければならない。しかし、このような競合する概念図式は、われわれの言語全体である必要はない。この場合概念図式をわれわれの言語の一部分である何らかの専門分野に関するものだと考えても上記の考えは言える。だとしたら、それは、デイヴィドソンの概念図式の規定とは異なるものでありえるだろう。そして、第二章で論じたクーンやグッドマンの場合の概念図式は、そのようなものだと考えられたのである。

また、競合する概念図式を認めて考察の対象としうる場合にも、自分の概念図式だけでなく、相手の概念図式を理解することができなければならない。なぜなら、相手の概念図式を理解したうえでないと、自分の概念図式と相手の概念図式の比較は生じないからである。そのように考えるならば、それらの概念図式は、相互理解可能という条件を満たしていなければならない。

さらに、競合する概念図式を認める立場をとるならば、概念図式に関して何らかの判断

ができなければならない。たとえば、自己の概念図式の相対化の場合と同様に、予言が成功しないような概念図式は適切なものとは見なされない。もちろん、概念図式に関して判断するための厳密で確実な基準があると考える必要はない。そうではなく、競合する概念図式の存在を認め、相手の概念図式を承認したうえで、何らかの理由で、自分の概念図式を持ち続ける、もしくは、相手の概念図式を選択するという意味での、概念図式に関するメタな判断が可能だということである。

以上のように、われわれの生活のなかでは、自己の概念図式の相対化という形と、現実に競合する概念図式の存在を認めるという形の二つの相対主義的な考えが生じうるということがわかった。

そして、そのような相対主義的な考えが満たさなければならない条件も明らかになった。まず第一の条件は、複数の概念図式の存在を認めなければならないということだった。そして、ここでは、そのような概念図式が、必ずしも、デイヴィドソンの規定する概念図式である必要はないということも述べた。次の条件は、それらの概念図式は、相互理解可能でなければならないということだった。そして、さらなる条件は、そのような相対主義は、概念図式に関するメタな問題に対しても何らかの評価ができることを認めなければならないということだった。

以上のような考察により、われわれの生活のなかで生じる相対主義的な考えが、相対主義批判を避けるための条件を満たしているということがわかる。

第四節　まとめ

本稿では、相対主義をめぐる状況が混乱しているという認識の上に立ち、そのような相対主義をめぐる状況を整理し、相対主義としてどのようなものが考えられるのかを示すことを目指していた。

第一章では、〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉の内容を整理するため、さしあたりの指標を提出した。つまり、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》、《概念図式の評価基準》という三つの指標を示した。

第二章では、それらの指標を使って、〈相対主義的に見える考え方〉、具体的には、クワイン、クーン、グッドマンの考えを分析した。

第三章では、なされてきた〈相対主義批判〉、具体的には、デイヴィドソン、パトナム、バーナード・ウィリアムズの考えを、同じく先の三つの指標を使って検討した。

そして、本章では、まず、相対主義を整理するために暫定的にとってきた三つの指標の検討を行い、本稿で扱ってきた〈相対主義的に見える考え方〉と〈相対主義批判〉が本当に対立しているのかどうかを考察した。そして、〈相対主義批判〉は、〈相対主義的に見える考え方〉に正当に向けられたものではないという結論に達した。さらに、それらの考察を受け、われわれの生活のなかで生じる相対主義的な考えが、相対主義批判を避けるための条件を満たしていると論じた。

けれども、本稿では、そのような考えが本当に概念相対主義と呼ばれるに値するのか、もし呼ばれるとしても、そのような相対主義に本当に欠陥がないのかについての考察はなされなかった。それについては、今後の課題としたい。